

本大学における私の英語教育

門 脇 正 典

東亜大学 人間科学部 人間社会学科
e-mail: kadowaki@toua-u.ac.jp

私は教育と言うのは、人の心に種を蒔く仕事ではないかと考えています。大抵の場合、教師自身は彼等の心の中に蒔いた種がどれ程実を結んだかを見届ける事は出来ませんが、蒔いた種が出来るだけ実り豊かなものになるよう、創意をこらす事は出来るのではないかと思います。そこで本稿では、東亜大学の英語教師として私が取り組んでいること・心がけていることなどを簡単にご紹介したいと思います。なお私の授業は、本学における2007(平成19)年度の優秀授業賞に選ばれており、多少は参考にして頂ける場所があると思います。

英語教育に関しては、何年も英語を勉強したにもかかわらず一向に英語が身に付いていないという批判が聞かれます。英語にはPractice makes perfect. (習うより慣れよ)という諺がありますが、従来の英語教育にはこの「慣れる」という要素が欠けていた事が、こういった実感を伴う批判を招いている理由の一つではないかと思われまます。そこで私の授業では、前半の文法を取り扱った部分で習う事に重点を置き、更にそれに加えて後半の部分では慣れる事にも重点を置いた授業を展開しています。こういった実践を通して、授業において発見と創造の場の実現を目指す事で、成果をあげる事が出来ると思っています。

東亜大学の英語教育の特徴は、学生のためにきめ細かいカリキュラムが組まれているという事です。本学の英語教育は、TOEICの教育方針に準拠し、学生の読む、書く、話す、聞くというバランスのとれた実践的な英語力の向上を目指しています。

TOEIC (Test of English for International Communication) というのは、英語のコミュニケ

ーション能力を幅広く評価する世界共通のテストです。一部では受験のテクニックを競うものだという批判もありますが、最近では英語課程の単位認定要件として認める大学があり、また海外出張や駐在の基準、昇進・昇格の要件として採用する企業もある事などから、TOEICは教育の場において認知されていると共に、社会に出た場合英語を生かす有効な資格の1つであると考えます。本学ではこの世界で最も普及している英語力向上テストであるTOEIC対策としてTOEICの他にTOEIC Bridgeを授業の一環に取り入れています。これは文字通り「TOEICへの架け橋」という意味で、TOEIC導入のテストです。英語Ⅰ、Ⅱでは原則的にTOEIC Bridgeを全員が受験し、英語Ⅲ、ⅣではTOEIC受験の準備を行います。英語Ⅴ、Ⅵではそれらを踏まえて、更なる英語の総合力の養成を目指します。

本学では学生に対する英語教育をきめ細かく行なうため、入学後に英語のクラス分け試験を実施しています。このクラス分けにより、一人一人の学生の英語習得の程度に応じた効率的な英語の授業が行なわれています。

こういったカリキュラム構成の下、私の授業では学生達がより英語学習に興味を持ち、実力をつけるよう様々な工夫をこらしています。まず授業に対する集中力を持続するため、授業時間を大きく2つに分けています。特に語学においては、少しずつ段階を踏んで知識を習得する事が求められますが、この基礎知識が確かでない学生のため、前半では語学の土台とも言うべき文法を基礎から丁寧に説明します。これにより、今更人に聞けないと思ってあやふやであった英語の基礎知識が正

確になる事によって、英語学習に対して積極的に取り組む姿勢が出来ます。方法としては、まず説明事項を簡潔に板書して学生に書き取らせた後、各事項について一つ一つ分かり易く説明を加えます。説明を終えた後で、説明した事項の知識を確実なものにするため、練習問題を解いてもらいます。その後選択問題の場合は全員に目を閉じてもらい、正しいと思われる解答を選択して挙手により答えてもらいます。それに続いて学生を指名して解答を言ってもらい、先程の目を閉じて答えてもらった結果に対応して説明の仕方に変化を付けます。

文法についての説明を終えた後、TOEIC Bridge対策の授業を行いますが、更に学生の基礎力を伸ばすため、この時点で英単語の語彙を増やすレッスンをします。具体的には毎回TOEIC Bridgeに良く出る単語を板書し、次の授業までに意味と発音を調べてきてもらいます。TOEIC Bridgeでは聞き取りの理解が大きなポイントになりますが、この能力を伸ばすため発音に注意を促し、辞書で意味の他に発音記号を確認し、自分で発音するよう指導しています。授業ではまず学生を指名し、前回は宿題として板書した単語をしっかりと発音してもらい、発音が誤っている時は訂正して正しい発音が出来るようにします。その後その語の意味を答えてもらい、用例などについて説明を加えた後、各単語を私の後について全員で発音して各自再確認してもらいます。その後次回までに宿題として調べてきてもらう単語を板書し、発音や意味についてあらかじめ注意する点を説明します。

TOEIC Bridgeは、写真描写問題、応答問題、会話問題、文法・語彙問題、読解問題の5つの問題形式から構成されています。写真描写問題というのは、問題にある写真を見た上で4つの文を聞いた中から、その写真を最も適切に描写している文を1つ選択するというものです。このセクションでは、まずテキストにある問題の写真を注意深く見てもらい、次に全員に目を閉じてもらいます。その後私が読む選択肢の文の中から、正解と思われるものを選択して挙手してもらいます。その後目を開けてもらい、今読んだ4つの文のディクテーションを実施後、各文を板書し、間違っている部分は訂正してもらいます。その後指名した学生

に板書した文を読んで和訳してもらった後、答を言ってもらいます。学生の音読、和訳、解答について各々解説を加えた後、板書した文を全員で目を閉じて私の後について暗唱してもらい、次の問題に移った後、同じような方法で授業を進めていきます。

応答問題というのは、問い掛けの文を聞いた上で3つの文を聞き、その中で最も適切に応答している文を選択するというものです。このセクションでは、まず学生に目を閉じてもらい私が読む問い掛けの文とそれに対する選択肢の文の中から、正解と思われるものを選択して挙手して答えてもらいます。その後は前記のセクションと同じような方法で授業を進めていきます。

会話問題というのは、会話などの話とその内容に関する設問を聞いた後、4つの文を聞きその中で設問に最も適切に答えている文を選択するというものです。このセクションでは、学生に目を閉じてもらい私が読む会話、設問及びそれに対する選択肢の文の中から、正解と思われるものを選択して挙手して答えてもらいます。その後は、前記のセクションと同様な方法で授業を進めていきます。

文法・語彙問題というのは、文中の下線部の空所に最も適切な語を4つの語の中から選択するというものです。このセクションでは学生に目を閉じて下線部の箇所を除いた文とそれに対する選択肢の語を聞いてもらった後、正解と思われる語を選択して挙手して答えてもらいます。その後は前記のセクションと同じような方法で授業を進めていきます。

読解問題というのは、問題文に対する設問に対して、4つの文の中から最も適切に答えている文を選択するというものです。このセクションでは問題文を板書し、難しい単語や文法事項の説明をした後、指名した学生に読んで和訳してもらいます。その和訳に対して説明を加えた後、学生に目を閉じて設問の文と選択肢の文を聞いてもらった後、正解と思われる文を選択して挙手して答えてもらいます。その後は前記のセクションと、同じような方法で授業を進めていきます。

授業の終わりには、実践的な復習としてTOEIC Bridgeの実際の試験を想定し、過去に解説した問

題の中からアットランダムに出題し、学生に目を閉じてもらい正解と思われるものを選択し、挙手して答えてもらいます。

私の授業の特徴としてはまず、学生の口、目、耳、手を総動員させ、全身を使って英語を身に付けるような工夫がこらされているという事です。例えば口を使うという点に関しては、リスニングパートの場合、私の後について英語の文章を繰り返して言ってもらいシャドーイングという教授法を取り入れています。目で見た後に発音するのではなく、英語をまず音のかたまりとしてとらえ、耳で聞いた音を忠実に再現する練習を積む事で、学生は赤ん坊が言葉を覚えるのと同じ自然な過程を経て、英語を確実に身に付けていきます。また、いずれのセクションに関してもリスニングに対する練習、特にディクテーションを積極的に取り入れています。TOEIC Bridgeにおいては、リスニングの出来が全体の出来を左右するといっても過言でない程、重要なポイントになっています。そこで私の授業では前述のように毎時間ディクテーションを実施する事により、自然にリスニングの力を養います。単に聞き取るだけでなくそれを書き取ってもらう理由は、例えば漢字の習得に関して言うと、我々は何度も記憶したい漢字を繰り返して書いている内に、自然に覚えていきますが、記憶に定着させたい事は何度も書いて確認している内に身についてくるものです。この方式を取り入れる事により、学生は無理なく合理的にリスニング並びにライティングの能力を伸ばしていきます。

更に、学生に目を閉じて答えてもらう事で、学生は周囲に惑わされなくて間違いを恐れる事なく積極的に授業に参加出来、また私は私の説明に対する各学生の理解度を的確に把握する事で、その結果をフィードバックします。即ち解答の説明はこの結果に対応して更に詳細に説明を加えたり、簡略化したりしてメリハリをつけ授業の効率化をはかっています。こういった学生の解答情報の積み重ねにより、各学生の英語の分野別における能力の把握が出来、個々の学生に対する適切な指導をする事が出来るようになっていきます。

私は学生一人一人の力を伸ばすため、出来るだけ学生の良い所に注目し誉めるように心掛けていきます。そのため今まであまり英語の学習に積極的

でなかった学生が、この事により英語の学習意欲を刺激され、英語の能力を伸ばしていくという例がこれまでも少なからず見られました。

2007年度前期の英語 I、TOEIC Bridge IP (IP: Institutional Programの略称で、団体特別受験制度の事を意味します。本学の場合本学の教室を使用し、原則として前期・英語 I、後期・英語 II の受講生全員が受験しています。)の結果に関して言うと、全体として見た場合、前回同時期には、リーディングパートの平均得点がリスニングパートの平均得点を1点上回っていました。この結果リスニングパートをやや苦手に行っている傾向が見られましたので、私の授業ではこの弱点を克服するため、前述のようにディクテーション実施を始めとするさまざまなリスニング能力を高める工夫を取り入れました。この結果、リスニングパートのベスト3のうち1位と2位は私のクラスの学生であり、一定の成果をあげていると思われまます。この結果をふまえ、リスニングパートとリーディングパートの得点のバランスを崩さずに、いかに両者を合わせた得点の向上をはかるかが、今後の課題であると思えます。

TOEIC Bridge、TOEICの導入に際して私が苦労したのは、学生がこの試験を受験する際のモチベーションをいかに高めるかという事でした。この点に関してはこれらの試験の意義について丁寧に説明を繰り返し、学生の得点能力が増すにつれ学習意欲と共にモチベーションが高まっていきました。

こういった試験を導入する事によって良かった点は、全学統一の試験を実施する事で、自分が本大学の学生の中でどの順位にあるのかを明示される事から、具体的な順位向上などの目標値を設定できる事により、大いに学生の勉強の励みになっているという事です。

また学生の声としては、学内で受験して様子が分かったので、卒業後もステップアップする際の有力な資格として受験に挑戦し続けたいといった、肯定的な評価を得ています。

英語の授業を通じて私が心掛けている事は、まず丁寧に分かり易い授業を行なうという事です。英語は特に体系的の一つずつ積み上げていく科目ですから、その何処かに欠損があるとそこから分

からなくなってしまう。そこで英語が苦手な学生にどこが分からないかをまず自分で認識してもらい、そこからもう一度スタートし直す事で英語に再チャレンジし、英語に新たな興味を持ってもらうように努めています。また学生の良い面に注目し、繰り返し肯定的な評価をする事で学生が英語という科目を通じて、自分自身に対する全体的な自己評価を高めるような指導を心掛けています。

一つの語学を習得するという事は、一つの新しい世界が開けるといふ事を意味します。以上述べましたようにささやかながら創意を心掛けている私の授業において、一人でも多くの学生が自らの手で新しい世界を切り開いてもらいたいと心から望んでいます。